

江戸時代から続く 大谷の打ち上げ花火

今年もいよいよ台風シーズン…
二百十日もまもなくやってくる時
節になった。

自然の暴威は人力で防ぐことも
できないが、せめてその損害を最
小限にとどめるようにできる限りの
用意をおきたいと思う。

この二百十日は全国的に風神祭
が行なわれているようですが、大
谷地区の風神祭は県下でも有名で
あることは皆さんもすでに承知
のことと思います。

この風神祭にもなつて花火師
である白田藤三郎翁を訪れて風神
祭について聞いてみた白田藤三郎
翁(七十才)は、花火師として地
区民から親しまれ、祭りごとの花
火の仕上げはほとんど白田さんの
手によって行なわれていたそう
です。

花火大会三位に
明治三十年から大正十四年まで
花火製造をやつて来た、風神祭又

風神祭につきものである花火は、江戸時代から
大正十四年まで大谷地区で製造されてきました。
大谷風神祭シンポジウムの折、堀敬太郎さんか
らこの広報記事のことについてご説明いただきま
した。
記事によると、大谷地区には白田内記家と白田
外記家という二つの勢力があり、当時、火薬の取
り扱いは医師が行つたため、内記家は田中医者を
製造元として松本連と称し、外記家は浜田医師を



は色々なまつりごとには自作の花
火を打ち上げ村人から非常に喜ばれ
て来た。

明治四十三年に東北六県の花火
大会に出場して第三位に入賞した
ことは忘れられない。賞品として
貰つた時計はいまもって健全であ
り正確に時を知らせてくれると当
時の模様を語つて下さつた。

大谷地区は最上川であつ
た
大谷は四方高い山に囲まれ、昔

製造元とし旭連と称して、お互いが競い合つて技
を磨いておりました。
明治三十年にはその二連が合体し、旭連金玉屋
煙火製造販売となり、大正十四年まで続きました。
明治四十三年には東北六県の花火大会に出場して
第三位に入賞したそうです。
大谷風神祭に行つたときには、この歴史を思い
ながら花火を見上げるのもまた一興ではないで
しょうか。

は最上川
の流れた
大きな谷
で、稲作
も他村に
比べて軟
弱に育ち
、二百十
日頃にお
それれる
嵐には一

たまりもなく倒され、不作が続い
た年は木の実、草の実を食べてい
たと言つたことをつたえられている
現在科学の進歩した時代ですが
ら嵐の原因や時期も予想されるし
又ある程度防ぐこともできますが
大昔はすべて神のたたりかとしか
考えられなかった。

花火の歴史
この風神祭につきものである花
火の歴史について申し上げますと
大谷には、白田内記と白田外記な
る人がおつた。この二人の勢力の
あつた時代、今から少なくとも三
百年前頃からこの風神祭をにぎや
かにして花火が上げ
られたそうです。
当時火薬は医師が
取扱かわれたので内
記は田中の医師を製
造元として松本連と
称し、外記は浜田医
師を製造元とし、旭
連と称しお互が競争
して上げたと言われ
ている時勢は變つて
明治三十年警察法改
正により、火薬の取
締りが強化され、こ
の二連が合体し旭連
金玉屋煙火製造販売



※町報あさひの記事は、コピーした画像を使用しておりますので、
文字が見えにくい箇所もございます。どうぞご了承ください。